COSMOS集

「あすなろ集」特選

鈴木竹志選

書いても書いても　くどう れいん＊岩手

船頭の孫が投げれば棟梁の孫がバットを振る島の朝
締切は耳から百合が咲くように芳しくなる夜ごとに強く
わたしの中のわたしのふりをするわたし　おでんの汁にうどんを入れる
雪礫ぎちっと作りどの背にも投げられなくて天へと捨てた
地球儀のように林檎を剝きたくなる　書いても書いても書くことがある

結婚記念日　水鳥葉子　茨城

木の葉髪二種類床に落ちてゐて夫は真つすぐ我のはうねる
旧姓の二倍の時を夫に添ひ今日は二人の結婚記念日
今すべて終へる時待つ九十五の母あつぱれと手を握りしむ
水仙の清き香父に供へんと立春の朝庭にかがみぬ
〈風邪気味〉は言ひ訳なのよ本当は行きたくないだけ〈今日休みます〉

新聞小説　荻原栄子　埼玉

今一番知りたき事の伏せられて余談を挟む新聞小説
退職からはや二十年穏やかな朝を楽しむ新聞小説
朝なさな短くあれど主婦我の非日常なる新聞小説
二度ばかり翡翠を見しこのあたり葦の抜かれて護岸の石垣
夏の日に小さき木蔭を呉れてゐし川辺の梅檀伐られてしまへり

小さな銀河　押火美奈子　千葉

幼き日からの梅見のルートなり犀星の弟子の家まで歩く
梨味のゼリーとプリン姪にあげ小さな銀河を思ひゐるなり
キルティングされた黒色帽子にはバラのコサージュつばはベロアで
「倫理学専攻風の炒めものは少しお酒を入れることだよ」
「うらなづみゐる」と白秋を歌はせしきんもくせいの香おもへり冬に

弁当箱　谷真樹　神奈川

さざんくわの咲ける垣根を過ぎゆきて門の表札に椿とありぬ
樹の下で次男と同じもの詰めし弁当箱の蓋を開けゐつ
からつぽの弁当箱をしまはむと手提げを覗けばけやきの葉ひとつ
南口の防空壕はユンボにて削られ埋もるる昭和百年
着々とユンボは丘を削りゆきトラウマの上にマンションが建つ

大野　英子選

レンズを開く　　松　下　誠　一＊東　京

切りあげて梅を見にいく平日のそれなりに混む丸の内線
庭園の水緩やかに動くのを見ていた　白い花びらの下
梅林に日の差す向きをたしかめてきみは動いてレンズを開く
生きている限り会えない人の居て季節になればネモフィラを見る
歯磨きをしなおすほどに眠剤の苦さが舌に移ってしまう

たんぽぽ先生　　松　本　　遊＊東　京

片隅に若き日のわれが坐りいる夕暮れの名曲喫茶ミニヨン
自民党大勝の夜は漠然と不安こみあげ凍てつく銀河
熟すれば甘くとろける紅まどんな長生きをせんうまいもの食い
ことことと煮れば味しむあめ色のぶり大根に秘めし荒海
かかりつけ医院が閉まるひっそりと春日の中のたんぽぽ先生

省　　線　　三　木　康　史＊東　京

ウィンナーコーヒーの溶けるクリームに祖父の面影、はや半世紀
山手線を省線と呼ぶ祖父と行きしフルーツパーラー、キウイの緑
スーパーの値札は許容価格超え食材が日々視界から去る
手づくりのチキンスープに目を丸くして喜んだ三歳の顔
美味しいと驚く笑顔をもう一度見たくて今日も野菜を刻む

コルティナの青空　　五十嵐　トシエ　新　潟

あちこちに大豆ころがる家の中立春すぎて大雪の降る
父の顔見むと交互に帰省する娘と話せば吾もやすらぐ
川と水好きな子と行く破間川（あぶるま）の橋から見下ろす岩と水底
子と行けばカートに予定外の品次々増える　たまには良いか
「ＹＯＮＥＸ」の文字が舞つてるコルティナの青空を背に何回も舞ふ

ひとりとメダカ　　鈴　木　美恵子＊長　野

節分のひとり暮しの豆まきは鬼になったり福になったり
恵方を向き世界の平和を願いつつ手作り海苔巻きもくもくと食む
窓越しの光がやる気を連れてきて剪定作業始めるかいざ
餌をやる手元に明るい陽がさしてひとりとメダカ冬を越えたり
朝の陽が明るくなったねメダカさん話しかけやる餌やりながら

鈴木　千登世選

余　白　の　白　　奥　村　幹　男＊愛　知

目立て終え充電完了チェーンソー凍る大気を震わせうなる
冬枯れがこのまま続いてくれればと猛暑の夏の草刈り思う
半世紀前のハイカラ住宅地生活感なき家の混じれり
冷えた部屋冷えたヴィオラの冷えた弦　堅き音色を弾いてほぐさん
長寿そも余白の白か人生の色はまだまだ自在に塗らん

星の感情　小田沙也加＊愛知

あぶく立つさまを見守りつづけた夕１３００度に石はとろけて
午前4時のオーバーヒートに囚われた実験施設の果てなき白夜
炉の中で生まれ変わっていく石の赤熱それは星の感情
崩壊のあとには重さ　炉にくべられた石はいまマグマに変わる
脈拍に合わせてここに波はくる矩形パルスは息継ぎと思う

手型足型　中村泰子＊京都

笑い顔きょとんとした顔不満顔ながい眠りを起こされた土偶
子の手型足型とった親達ははしゃいだろうか縄文の世も
縄文に筋萎縮症患者あり手厚い介護の史実に拍手
容赦なく吹き入る風は喉を駆け肺を威かす今日は大寒
朝早く鼻腔に届く水仙の凛とした香に快復を知る

窓のかたち　山添聖子＊奈良

衛星のように私に付いてきた子らの軌道は遠くなりゆく
食パンは窓のかたちをしてるから朝を始めるのにふさわしい
ふるさとの亡き祖母の家想うとき遠く電車の音が聞こえる
もう少し寛容になりたくなって猫を一匹こころに飼ってる
いさなとり〈灘〉の入試の問題にガザの子の詩が選ばれており

パパの鼻歌　浦木妙子＊鳥取

お揃いのピンクのメットが前うしろママチャリを漕ぐパパの鼻歌
わが後を追いて離れぬ猫の〈たら〉鬼退治に行く家来のようだ
立春の泡雪突き上ぐ水仙の青き新芽の細胞分裂
冬ざれの庭もバケツも花鉢も白よりしろき雪に覆わる
昨日より少し明るい口紅を丁寧に塗る立春の朝

斉藤　梢選

私のにほひ　末田陸子　山口

月冴えて庭の蹲踞はつきりと目に映るなり節分まぢか
朝のベル鳴りしあとよりわがスマホ行方不明で手足もがれる
冬空にスケートボード舞ひあがる若いいのちの回転まぶし
腋の下体温計を差しいれて顔近づければ私のにほひ
雲間より三日月いづるその刹那満月よりもひかりあかるし

わたしの道を　落合美代子　香川

おとなりの樹齢百年柿の木の最後の頑張りあまた実を成す
言ふなれば小さき気付きがふくらんでなんだかんだでわが歌できる
こんなにもきれいだつたかわが夫よ柩のなかの世界にねむる
とむらひの雑多な手続き前にして喪主なるわれを見てをりわれは
なけなしの負けん気あつめて歩きだす君の知らないわたしの道を

博多座　福田春子　福岡

玄米は滑りやすきよ三キロを量りて買へば零れる幾粒
昨夜追ひし鬼は去りしか玄関に大豆三つぶが残されしまま

予報では二月八日は雪マーク間違つてない急に地吹雪
降雪の予報の朝を博多座へ中村獅童「あらしのよるに」
舞台から客席通路を走り抜く役者の衣裳はためく博多座

新若布　　原　万紀　長崎

免許証の返納間近倉庫には山と積まるる菜園の肥料
あをあをと茹であげられし新若布西海の海の春を味はふ
急坂を上りつめれば姉の家あかりのごとく紅梅咲き満つ
認知症の友との会話ゆつくりと言の葉かさね春をひきよす

狩野　一男選　「その二集」特選

犬介護神　　やすこ＊青森

まさか犬介護するとはさいごまで面倒みると誓ったけれど
あなたさまの要求通りうごきましょ鳴きやまぬ犬の介護しており
鳴きやまぬ犬の気持ちはどれなのかおしっこうんち空腹不安
ゆったりと朝がおとずれ始まりぬ追われる一日犬の介護よ
しろしばを介護するときわたくしの体調不良どこかにいってる

添削は来るはずの明日すればよし眼かすめば海馬もかすむ

樟脳匂ふ　　佐藤　久美子　大分

祖母われに思はぬ至福ぞ花嫁の孫の手を引く亡き夫よ見よ
四十年（よそとせ）をすぎし団地と重ねつつ伐られしさくらの年輪なぞる
とほき日に母編みくれしセーターの編目なぞれば樟脳匂ふ
夕闇のせまる田の畔案山子らは肩を寄せ合ひ何を語るや
冬枯れの庭で茎立つ水仙の黄色の花は標のごとし

心の中の時　　佐々木　真知子＊宮城

ストーブのヒュンヒュンだけが響く部屋さびしい心あたたかくなる
朝日差し青く輝く冬の空夫がいるかもあの青の中
手をつなぎ歩いてくれた冬の夫南国育ちの吾を気づかい
一人居の生活四年経つけれど心の中の時は動かず
雪降る日春待草のつぼみあり坂道登るわれを励ます

水餃子　　池田　光樹　千葉

北京語を話せるふりの途中です妻の差し出す拼音（ピンイン）を追ふ

新年快楽（あけおめ）と画面ごしにも言ひながら吾子の紅包（ホンバオ）受けとるスマホ
中国の赤き紙幣を愛づる吾子　使へぬ紙の宝となりぬ
正月と旧正月にすりへつたわれの財布の電子残高
焼き色のあとのビールを思ふとき白くつるんと水餃子をり

ピンチの知らせ　　新美亜希子＊神奈川

春の夜　藪の中から生き物がざるりと走る次の藪へと
繰り返す「はい」の響きがだんだんと硬くなるのはピンチの知らせ
ハットですメーカー名は不明です駅で落としたかもしれません
遺失物扱いどころで音は消え「古びた帽子」画面が光る
こんにちは　天性の声の明るさに救われて今日もやっていけるよ

冬を潰せり　　吉本美加＊神奈川

あやとりの子に貸す指のうれしさよ　吊り橋、田んぼ、川、船、蛙
なににでもなれる未来を持てあます我が子の長いひとりあやとり
その指を離せば解けて空色の毛糸にかえる四段ばしご
階段を上るつま先硬くしてブーツの中の冬を潰せり
寄る辺なさ炭酸水に割って飲む泡の形を確かめて飲む

原賀　瓔子選

夜伽　　武井恵子　東京

きさらぎの信濃のまちの通夜室にちひさきこたつ置かれてゐたり
「姉さんのいだてん走り」を語りたる姑（はは）の夜伽にそのいもうとは
伊那谷の亡き姑の里を巡回す移動図書館「ドリーム号」は
かなしみがふたつかさなるわたくしのけふの重さに耐へてゐる椅子
仕舞ひ湯も新湯（さらゆ）もぬくくときひびきなり　七人家族のとほき日のあり

この道　　谷口菜月　東京

しらゆきが斜瀑のごとく降るあさの衆院選の見えぬ争点
雪に見惚れ焦がした食パン削ぎをれば袖にちりちり火の粉のにほひ
腹張りて眠れないよる改憲を悲願といふ首相のゐる国で
かあさんは雪だるまをこしらへてるよ雪だるまみたいなお腹して
親のかほした白秋と行き合ひぬ薄暮わが子にうたふこの道

矢川緑地　　宮崎洋子＊東京

早春の水のすがたが見たくなり矢川緑地へ歩いてゆきぬ
矢川には水の音なし記録的小雨の令和八年雨水
掛矢打ち児ら作りたるそだ柵のカーブに沿いて日の翳りくる
夕されば冷え刻々と深まりて白鷺去りし水の謐けさ
この杜のどこかで小さき殻われてかなへび孵るとき春が来る

奇跡　　あゆみ＊新潟

大福にいちごを入れた人がいるそういう奇跡がこれからもある
ミシミシと世界が広がる音がする最中のような殻を破って
世界中すべての時計が止まったら誰が時間を決めればいいのか
セロハンテープの交換をした者にしか見えぬ小さな袋小路よ
加湿器の視点から見る天井に浮かぶシーリングライトの満月

ライフライン　　鏡　康男＊三重

月一度チクッと刺され血をとられ礼まで述べて文句言わざる
採血後診察までの半時を幾度もソファーを離れて歩く
血液をライフラインと思うなら血小板は匠のごとし
血糖値さがり少しは甘いものつまみ食いするマカロンひとつ
今朝の君きげん悪そう遠回しに観測気球打ち上げてみる

木畑　紀子選

眠り双六　　川田　ゆかる＊大阪

空き箱はローラースケート履いているように滑るよ風吹く町を
ため込めば胸が苦しく吐き出せば後味悪い愚痴というもの
布団からつんと爪先でてしまい眠り双六ふりだしに戻る
硝子玉の中に凍ったアナログの時計が今の時刻を指してる
鉛筆を持つたび気づくマイブームひらがなの〈る〉を丁寧に書く

知足　　秋月晶江＊和歌山

少しずつ曲がり始めた背の丸み子の居る時は伸ばしてみせる
処方さるる誘眠剤も効き目なく朝刊来るを確かめて寝付く
死に近き父は右手を振り上げて宙に書きたり「知足」二文字
考えて考えてまた考えて零下二度の日投票をせり
戦争に向かわぬ国を目指すとは一度も言わぬ最強の女

イオンモール　　吉田博志　鳥取

田舎町のイオンモールの大きさは正面口を三つ設ふ
敬遠をしてゐしイオンに来てみればモノ豊かなり客もそこそこ
甘口の角煮ラーメン啜りつつ作りし人の視線を受ける
如月の雪にこもれる二日間もちひを焼きて過ごしたるかな
母逝きて煙草の多くなるわれを案じてをらむ仏の顔で

生きてる父　　谷貝香織＊佐賀

父九十母八十の元日は吾も六十水仙芽吹く
重篤の父を看ながら冷静に歌を詠んでる不謹慎な吾
何もかも上手くいかねど大丈夫何もかも上手くいったことはないだろ
今日もまた確かに生きてる父である行くたび剃れど元気に髭伸ぶ
一生に一度ひらくという窓の光を父が少し見ている

付かず離れず　　工藤愛子＊宮崎

坂道に趣のある店構え息子の働く神楽坂歩く
我が息子仕事や家事を日々こなし子らの夕餉にハンバーグ捏ねる
「鬼は外」なれど悪いと決めつけず思い浮かべる『泣いた赤鬼』
離陸前多くのスタッフ作業してチーム力にて飛ぶんだ旅客機
ジグザグに夫は歩いて我を待つ二人の散歩付かず離れず